牛久沼今昔 第一話

牛久市文化財保護審議委員
栗原（くりはら） 功（いさお）

牛久沼（太田沼）は香取（かとり）の海（海跡湖）だった

『香取の海』は万葉集などによまれる - 万葉集は奈良時代後期の完成 -

「地球の表面に岩石または地層ができて以来、今日に至るまで」を地質時代という。

地質時代を通して、汎（はん）世界的に「海進・海退」現象が何回も繰り返されてきた。

海進は、「陸地の沈降または海水準の上昇によって海岸線が陸側へ前進する現象のこと」で、これとは逆の現象で「海岸線が後退し、それまでの海底が陸地として現れること」を海退という。

日本列島において、最後の海進現象が起こっていたのは、今からおおよそ5000年前（縄文時代前期）のことで、気候の温暖化によって極地方の氷が溶け、海面の水位が著しく上昇したのであった。その水位は現在より3～5メートル高かったといわれていて、現在の茨城・千葉県境付近一帯は（地層および無数の貝塚が示しているように）、茨城県の北浦・霞ケ浦・牛久沼（太田沼）から、千葉県の手賀沼・印旛沼まで、ひとつ続きの内海（海跡湖）になっていた。

それがおおよそ3000年前（縄文時代中期）に海退現象、海面の下降が起こった。

香取の海は万葉集（奈良時代の天平宝字3年＝759年完成）巻11に、

『大船香取海恩愠下何有人物不念有（大船の香取の海に碇おろしいかなる人か物か思わざらむ）』とある。

1000年前（平安時代後期）までさかのぼってみると、延久（えんきゅう）年間（1069年～1073年）に完成した『今昔物語集巻25』に『衣河（きぬがわ）ノ尻、ヤガテ海ノ如シ』とある。『衣河』とは現在の鬼怒川（毛野川（けのがわ）とも呼ばれていた）を指しており、その鬼怒川の注ぎ込むあたりを海のようであると表現している。さらに常陸国（ひたちのくに）と下総国（しもうさのくに）の境をなすこの海を「内海」とも「入海」とも表現し、『此（こ）ノ海ノ中に、浅キ道ノ有りケル』とも記している。「海」とはいっても、所々に人の渡れる浅瀬があるような、水深の浅い内海であったようだ。当時は、この内海を香取の海と呼んでいた。が、本来、香取の海とは、内陸の奥深くまで入り込んでいる内海全体を指し示す呼称ではなく、下総国の香取郡（現在の香取市および香取郡）に面する辺りを指し示す呼称にすぎなかった。

一方、その香取の海が千載和歌集（平安時代後期の文治3年＝1187年完成）には、

『夏衣香取の浦のうたたねに波のよるよるかよふ秋風（藤原定家）』ともよまれている。

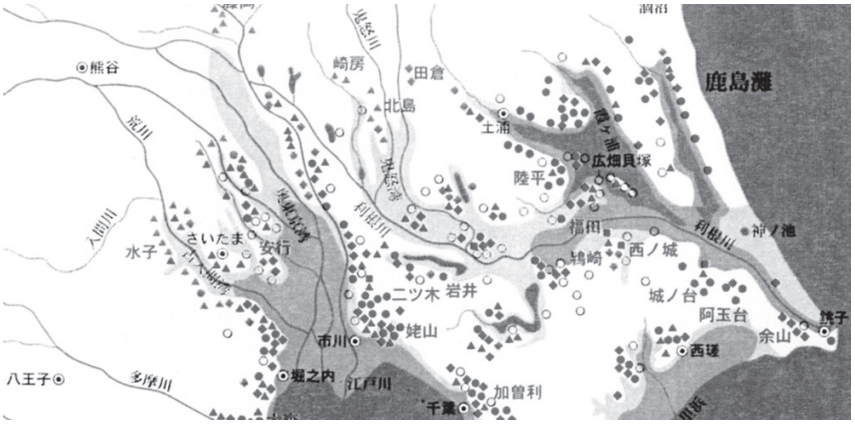
それはさておき、450年余り前（江戸時代直前）にさかのぼると、牛久沼（太田沼）から手賀沼までひとつ続きになっていた香取の海は、雨期を除き、水深がさらに浅くなっていて、萱（かや）（ヨシ、ススキ、チガヤ、カルカヤ、スゲの総称）が自生する中州が点点とし、所々に浅瀬があって、多数の小河道が蛇行（だこう）していた。

香取の海の海跡に自生する萱に由来する地名の萱場（かやば）と下萱場というのが旧藤代町（現在の取手市）にある。

牛久領主由良国繁が太田沼を「牛久沼」に改める

牛久沼はいつごろからかは定かでないが太田沼と呼ばれていた。

安土桃山時代の天正18年（1590年）8月、豊臣秀吉に河内・筑波両郡下合わせて5435石の領地を菟行（あとが）われた由良国繁が牛久城に移ってきた。当時は牛久城と大田沼沼内及びその南端の畔の低地（現在の龍ヶ崎市稗柄（ひえがら）町）は常陸国河内郡城中村に帰属していた。一方で牛久という地名に由来する牛久城と牛久宿のその名はすでに広く天下に知れわたっていた。そこで国繁が、呼称を太田沼から牛久沼に改めた。それは慶長元年（1596年）以降のことであった。



縄文時代前期の海岸線（つくばみらい市教育委員会発行『図説伊奈のあゆみ』より転載）